

重度訪問介護を利用するA氏のセルフ・エンパワメント過程とヘルパーの影響**—当事者と援助者の語りから—**

○ 愛知教育大学教育臨床総合センター研究協力員 氏名 岩川奈津 (009263)

キーワード3つ: 重度訪問介護、自立生活、エンパワメント

1. 研究目的

本研究は、重度訪問介護の介助者が利用者のセルフ・エンパワメントに寄与する可能性があるのかどうか、もし寄与する可能性があるとするればそれはどのような場合においてか、といった問題を考察する。

セルフ・エンパワメントの視点はクライアントなどの非専門家が、自らのエンパワメントを自ら定義し、専門家の導きや働きかけによってではなく自らの働きかけによってエンパワーしていこうとすることを重視する(R.Adams2003=杉本・齊藤 2007)。重度訪問介護を利用し自立生活を営む人は、自らの意思に基づいて介助者に指示を出し生活を営んでいる。そのような生活様式を持つ彼らのエンパワメント過程は、セルフ・エンパワメントの視点を持って捉えられるべきであろう。

ただし、いくら当事者が自らの力によってエンパワーするとしても、介助者からの影響を無視することはできない。重度訪問介護を利用する人の生活は、生活の様々な場面に介助者が介在することを避けがたいからである。介助者が当事者のセルフ・エンパワメント過程に対してどのような影響を及ぼす可能性があり、どのような立ち位置でかかわっていくべきかを検討する必要がある。

本研究では、重度訪問介護を利用しながら地域で自立生活を営むA氏とA氏の介助を担当するヘルパーを調査協力者とし、A氏のセルフ・エンパワメント過程に対するヘルパーの影響を明らかにする。A氏の事例を提示し、障害のある人が自らエンパワーしようとする時に介助者がどのようにあるべきかを検討するための一助とする。

2. 研究の視点および方法**(1) A氏のセルフ・エンパワメント過程の調査・分析**

A氏のセルフ・エンパワメント過程を明らかにするために、ライフストーリー・インタビュー(桜井・小林 2013)を用いて聞き取り調査を行った。インタビューデータに対してM-GTA(木下 2013)を用いた分析と、エピソード記述法(鯨岡 2010)を用いた分析をそれぞれ実施した。

(2) ヘルパーが与えた影響の調査・分析

A氏のセルフ・エンパワメント過程にヘルパーが与えた影響を明らかにするために、A氏の介助を担当するヘルパー3名に聞き取り調査を行った。それぞれのヘルパーに対して個別に聞き取りを実施した。3件のインタビューデータに対してM-GTA(木下 2013)を用

いて分析を実施した。

3. 倫理的配慮

A氏、A氏のヘルパー3名、A氏の利用する重度訪問介護事業所の担当者に、愛知教育大学研究倫理規定に従い作成した協力依頼書に基づいて研究目的、調査方法と手順、期間、プライバシー保護の方法を説明した。プライバシー保護はA氏やヘルパーの氏名・出身地などの個人情報を仮名とし、第三者から個人を特定できないようにした。文書と口頭にて説明を行い、承諾書への署名による同意を得て調査を実施した。なお、事例の公表については、調査結果を報告し、改めて了承を得た。

4. 研究結果

(1) A氏のセルフ・エンパワメント過程

A氏のセルフ・エンパワメント過程は①重度訪問介護を活用し自らの望む生活を実現させる、②A氏とヘルパーの関係性が変化し“ヘルパーさん”が“〇〇さん”へと変わっていく、という2つのしくみによって促進されていた。生活の中で①と②のしくみが働くことによって、A氏は、自己効力感・能動性・生活を自己コントロールする力の向上などのエンパワメントを実現していた。また、このようなエンパワメントの状態は、A氏の言葉では「生まれてきて楽しい」と表現された。

(2) ヘルパーが与えた影響

A氏のセルフ・エンパワメント過程を促進するしくみ②は、ヘルパーにとっては自らの成長(セルフ・エンパワメント過程)として経験されていた。3名のヘルパーは共通して、①A氏のヘルパーとなる、②介助が上手くいかない状況に陥る、③状況を打開するために互いに働きかける、④ヘルパーが自分の特性を活かしながらA氏の介助者として習熟する、というプロセスを経て成長していた。このプロセスの④に至ると、A氏の中でヘルパーは〇〇さんという個人として認識されるようになる。

5. 考察

A氏の事例では、ヘルパーは、①A氏の指示に従って体を動かしA氏の望む生活を実現させるための動作を実行する、②自らがヘルパーとして成長することがA氏のエンパワメントにつながる、という2つの側面で影響を与えていた。

本事例からは、ヘルパーと利用者のそれぞれのセルフ・エンパワメント過程が相互に正の影響を与え合う可能性を指摘できる。また本事例からは、ヘルパーが利用者のセルフ・エンパワメントに対してとるべき態度としては、利用者をエンパワメントに導こうとするのではなく、自らに求められている役割を全うするために自己研鑽することが望ましいのではないかと提起することができる。

Robert Adams(2003)Social Work and Empowerment: Thied Edition, Palgrave Macmilan(=2007、杉本敏夫・齊藤千鶴監訳『ソーシャルワークとエンパワメント—社会福祉実践の新しい方向—』ふくろう出版)